

中学校におけるインクルーシブ教育に向けたゴールボールの単元開発

—通常学級に在籍する視覚障害のない生徒への実践を通して—

小泉岳央 (千葉大学)

1. 目的

本研究では、視覚障害の有無に関わらず共に学び合える体育授業の単元を開発するために、リバー・インテグレーションの活用を焦点をあてた。そこで、特別支援学校の体育授業で扱われているゴールボールを視覚障害のない生徒に実施した。そして、2つの検証授業の中で、視覚障害のない生徒の学習成果から体育授業の1単元としての実現可能性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

第一検証授業は、中学3年(18名)を対象とした。毎時間の学習カードの記述内容を定性的コーディング(佐藤, 2008)を用いて質的に分析し、どのような思考が行われたか明らかにした。結果、ネット型球技に類似した技能に関する思考が行われていたことが明らかとなった。しかし、指導要領で求められている「空いた場所をめぐる攻防」「相手チームの特徴を踏まえた作戦」(文部科学省, 2018, p. 132)まで思考を広げられていなかったと考えられる。そこで、第二検証授業は、試合を客観的に観察しアドバイスできるガイドを新しく設置し、プレイヤーとガイドの対話・協働とおして技能向上を図るように立案した。2019年4月24日から7月3日、中学2年18名(男子8名, 女子10名)を対象に、9単位時間実施した。毎時間の学習カードの記述内容に加えて、作戦タイム中に行われたプレイヤーとガイドの対話も質的に分析した。

3. 結果と考察

作戦タイム中のプレイヤーとガイドの対話の中で、前半の成果について振り返りを行い、ゲーム分析をもとに、後半戦に向けた戦術の選択・決定をしていたことが明らかとなった(図1)。後半戦

のプレイについては、相手チームのフォーメーションを考えて、空いた場所を把握したうえで移動攻撃など戦術を工夫している学習者もみられた。さらに、学習カードの記述内容から、試合の成果だけでなく、ガイドの役割について思考している様子が明らかになった。プレイヤーは、プレイ中視覚情報がなく動作や判断、戦術の修正は困難である。そこで、視覚情報をもつガイドと協働することで、前半のプレイをより鮮明に振り返ることができる。これによりゲーム分析が活発に行われ、戦術的思考を深めることができると考えられる。

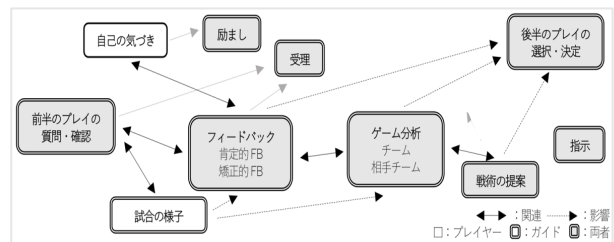


図1 作戦タイム中のプレイヤーとガイドの発話内容

4. 結論

プレイヤーとガイドの協働的な学びの過程は、スポーツビジョンの考え方を、自身の目のみを頼りにスポーツを行うといった“閉じられた能力”として捉えずに、視覚障害のない生徒の視覚情報を障害がある生徒と共有して協働的に発揮できるより“広く発展的な能力”として捉えることの意義であるだろう。ゴールボールは、プレイヤーとガイドが対話・協働することで、視覚障害の有無を超えてスポーツの楽しさを共有でき、共に学び合える可能性のある単元であることが示唆される。

5. 主な参考文献

- 1) 文部科学省(2018) 中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説保健体育科編.東京書房.
- 2) 佐藤郁哉(2008) 質的データ分析法:原理・方法・実践.新曜社.